

能村登四郎 第十三句集 「芒種」

ふらんす堂 一九九九年十二月十日



極寒の兄を葬るやこれも順

つられ咳して気まづさの車中かな

猫と猫恋なきごとくすれ違ふ

板前の皆まで抜かぬ独活のあく

紅梅をなほ濃くしたる雨後の霽



巷ゆく酔歌は卒業生とみし

ましぐらなる初蝶の我に来よ

傾ぎ癖知りたる雛を飾りけり

逃げ水の中に真紅の一車消え

ふと齡忘れてゐたり接木して



築組みに老の助っ人來りけり

師のごとく正座して春惜しみけり

蚊帳なき世蚊帳吊草の残りけり

甘き匂ひ残して消えし雨蛙

裏返るさびしさ海月くり返す



兜虫返しても捻ねじ子見えず

這ひ咲きに終り朝顔小さかり

風呂の湯を落す匂ひも夜涼にて

団欒にときをり応ふ端居より

今年米たしかな杓文字触りかな



みやこどり良夜の舟を慕ひくる

未だ泳ぐ人数へをり秋の海

落鮎にふるべき塩を手に残す

年々に旅の減りゆく渡り鳥

風呂吹に箸を刺しての思ひごと



春暁の何か始まる匂ひせり

忘れられてゐる水餅に似たるかな

雪吊のゆるみの時と思ひけり

涅槃図を掛ける太釘かと思ふ

蛤汁はまじゆのほどの濁りのよかりけり



飯蛸の糶場の隅に忘れられ

木蓮の生毛蒼や暁の雨

遅ざくら一つ飛び地の札所寺

近づいて見て白藤でなかりけり

螢袋うなだれ咲きの雨を呼ぶ





聲の出の俄によくて雲は秋

シーソーに煤逃げめきて坐りをり

加賀ぶりも年々薄れ雑煮膳

着る時の羽織裏鳴る淑気かな

毘沙門で別れし連れや福詣



去年よりも肥えたるここち初湯出て

やや肥えて藁うばひ合ふ寒雀

ひともがきして凍鶴の凍てを解く

残花追ふ旅となりけり伊賀名張

川筋に住むゆる臙庭に来る



終

